別紙様式１

令和元年度　学長戦略経費（公募型プロジェクト）研究成果概要報告書

経費の種類	□共同研究推進　□若手教員研究支援　■個人研究支援 □研究推進重点設備　□研究推進設備修繕
プロジェクトの名称	コーパスを活用した語の文体差を表す「文体値」に関する研究
報告者氏名・所属・職名	馬場　俊臣　・　札幌校　・　教授
プロジェクト担当者氏名・所属・職名	馬場　俊臣　・　札幌校　・　教授

研究内容及び成果の概要

日本語は、同じ意味であっても硬い書き言葉と柔らかい話し言葉とで異なる語が用いられることが多い。個々の語の文体の違いに関しては、近年のコーパス（大量の電子化された言語資料）を活用した文体研究では、コーパスを用いて語の文体差を客観的に数値化する試みが行われており、佐野(2016)の「語彙密度平均値」や馬場（2018）の「硬度平均値」が提案されている（両者をまとめて「文体値」と呼ぶ）。

本研究では、「硬度平均値」を用いた文体研究の一例として複合辞の文体の特徴分析、及び「語彙密度平均値」と「硬度平均値」との異同の分析を行った。

複合辞の文体の特徴分析では、助詞・助動詞的機能を持つ複合辞（～に関して、～とすれば、など）と単独辞（に、ば、など）との文体差を「硬度平均値」を用いて分析した、その結果、殆どの助詞的機能を持つ複合辞はより硬い文体に使われる傾向があることなどを明らかにした。（図１：単独辞と複合辞との硬度平均値を用いた文体差）

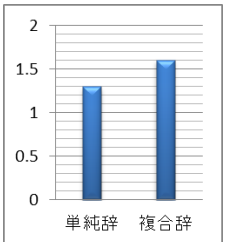

図1　文体差

また、「語彙密度平均値」と「硬度平均値」との異同の分析では、『日本語アプレイザル評価表現辞書（JAppraisal 辞書）～態度評価編～』に公開されている評価表現約4500語の「語彙密度平均値」と、その約4500語（BCCWJ図書館サブコーパス内の短単位の語彙素）の「硬度平均値」（『BCCWJ図書館サブコーパスの文体情報』の「硬度」の値を利用して求めた値）との相関分析を行った。両者の相関係数は「0.91」でありかなり強い正の相関があることを明らかにした。（図２：両者の散布図）

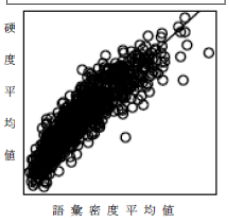

図２　散布図

本研究は、今後のコーパスを用いた客観的で精緻化した文体研究進展の基礎をなすものである。

〔文献〕
佐野大樹(2016)「語彙密度から見た語彙シラバス」森篤嗣(編)『ニーズを踏まえた語彙シラバス』、くろしお出版、pp.79-93
馬場俊臣（2018）「『BCCWJ図書館サブコーパスの文体情報』を利用した語の文体差研究の可能性」『言語資源活用ワークショップ発表論文集』3、国立国語研究所コーパス開発センター、pp.240-255
※図１、図２において硬度平均値は分かりやすさを考慮して反転した値を用いている。

成果の公表の状況

【学術論文】
・馬場俊臣「複合辞の文体差」（『北海道教育大学紀要　人文科学・社会科学編』70(2)、2020年、pp.1-12）

教育現場で活用可能な分野・教材等

国語科分野の語の文体に関する基礎的な知見を提供することができる。たとえば、「話し言葉」「書き言葉」や「硬い言葉」「柔らかい言葉」などの使い分けに関して、客観的なデータを提供することができる。

配布又はダウンロード可能な資料	馬場俊臣「助詞・助動詞で始まる複合接続表現の文体差」（http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/10521）
問合わせ先	代表者：馬場　俊臣 札幌市北区あいの里5条3丁目1-5　北海道教育大学札幌校日本語学研究室